聖剣の刀鍛冶と悪魔の刀鍛冶

八咫烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖剣の刀鍛冶と悪魔の刀鍛冶

【Ｎコード】
Ｎ６３２９Ｔ

【作者名】
八咫烏

【あらすじ】
盗賊討伐にやってきたセシリー、ルーク、リサ。追い詰められた盗賊が悪魔契約を行うも、そこに現れたのは一人の少年であった。刀鍛冶見習いを名乗る彼の名は高倉優。ファンタジーの中に放り込まれた刀匠は、異界でどんな刀を打つのか。

※本作品は小説投稿サイトａｒｃａｄｉａにて掲載したものを手直ししてこちらに再投稿したものです。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

本作はＭＦ文庫Ｊより刊行されている「聖剣の刀鍛冶」（三浦勇雄著）の二次創作です。
ジャンルは原作知識なしで現代人トリップです。

鍛冶師モノを予定していますが、突発的に書き始めた代物ですのでプロットがまともに立っておりません。
また、鍛冶の知識もほとんど無いので手探り状態です。
知識のある方から見たらおかしい点がてんこ盛りでしょうが、どうか生暖かい目で見守ってくださると幸いです。
過去に二、三作ほど書いてる（余所のサイトとかで）ので日本語はしっかりしてるつもりですが、誤字脱字・誤用などありましたらご指摘ください。
また、原作キャラをできるだけ壊さないようにしていきたいのですが、閃きで書いていますので一部キャラがおかしくなるかもしれません、ご了承ください。
それと、私はかなりの遅筆です。そこもご容赦ください。

何か情けない話ばかりですが、少しでも楽しんで頂けると幸いです。

Prologue

一瞬にして冷やされた鉄塊は、輝くような赤から鈍い灰色へと変色していた。
それから数十秒。
微動だにせず鉄塊を水に浸し続けていた彼は、鉄塊を水から取り出し、検分する。

薄く細長い刀。
焼き入れを経験した鉄塊は、鋭くかつ丈夫な刃を手に入れ、誇らしげに反り返る。
かくて、この鉄は”刀”と呼べる域へ足を踏み入れたのである。

「…焼き入れ、完了」

静かな一言。
しかし、やっとこで刀を掴んで見つめている彼のその言葉には、万感の思いが込められていた。

ただの鉄に命を吹き込む。
その総仕上げとも呼べるこの”焼き入れ”の瞬間が、彼は何よりも好きだった。

会心の出来である。
刀鍛冶の醍醐味とも言えるこの震えるような歓喜を、彼は魂の底から噛みしめていた。
これだから、刀作りはやめられないのだ。

ここまで来ればもう9割方完成と言っていい。
仕上げ研ぎをして、銘を切って、柄をつけて、鞘に納める。
半日あれば済むだろう。
そろそろ片づけて、残りは明日にしようか…。

「精が出るじゃねぇか、優。焼き入れは済んだのか？」
背後からかけられた声に、彼…高倉優（タカクラ ユウ）は肩越しに振り向いた。

「師匠、まだ起きてらっしゃったんですか？　…えぇ、今焼き入れが終わったとこです。
会心の出来ですよ！まだ師匠の刀の足元にも及びませんけどね」
満面の笑みを浮かべて喜びを表現する弟子を内心微笑ましく思いながらも、師匠は厳しい顔を崩さなかった。

「あたぼうよ。たかだか十いくつの若造に俺の刀を越えられてたまるかってんだ！
特におめーみてぇな出来損ないは、人の万倍金槌振るくらいで丁度いいんだ。
俺がポックリ逝く前に、せめて十分の一人前から半人前くらいにはなって見せろ！
それが師匠孝行ってもんだ、よーく覚えとけ！」
怒鳴るように言い放って背を向け、鍛冶場を出ていく師匠。
だが優は、彼が去り際につぶやいた一言を聞くことはできなかった。
その時彼は、既にこの世の人ではなかったからである。

「…腕上げたじゃねぇか…よくやったぜ」

彼が珍しく声に出した賞賛の声。
不幸なことに、それは彼自身の耳にしか届かなかったことを、彼はまだ知らない。

第一話

ぶつぶつと聞き取れぬ程の早口で一心不乱につぶやく刀鍛冶―ルーク・エインズワース。
その目の前には、不自然なほどに片目を見開く金髪の少女―リサがおり、彼女が見つめる先には不可思議な球状の空間が生まれ、男はそこに腕を突っ込んでいる。

その二人を背に庇うようにして立つは、赤毛の女騎士―セシリー・キャンベル。
彼女の目の前には、氷と冷気を纏う化け物―悪魔がいた。

―怖い、怖い怖い怖い！―

いくら騎士といえど、セシリーも正常な心を持つ人間。
防衛本能から生まれる危険な敵への恐怖心は消せない。
それでも両の足で地に立ち、敵を睨み付けていられるのは、偏に彼女の責任感と、後ろにいるルークへの期待からである。

「水減(みずべ)し。小割(こわり)。選別(せんべつ)。積み重ね。鍛練。折り返し。折り返し。折り返し。折り返し。折り返し。
―心鉄成形(しんかねせいけい)。皮鉄成形(かわかねせいけい)。造り込み。素延(すの)べ。鋒造(きっさきづく)り。火造(ひづく)り。荒仕上げ。土置き。赤(あか)め。焼き入れ。鍛冶押し。
下地研(したじと)ぎ―備水(びんすいど)研。改正(かいせいど)研。中名倉(ちゅうなぐらど)研。細名倉(こまなぐらど)研。内曇(うちぐもりじど)地研。仕上研ぎ―砕(くだ)き地艶(じづや)。拭(ぬぐ)い、刃(はと)取り、磨き、帽子なるめ」

何かを呟いている彼が何をしようとしているか、私には分からない。
聞けば、祈祷契約の文言のようでもあるが、それとは明らかに違っている。

ただ、彼が何かを創ろうとしている、それだけは感じられた。
おそらくは、あの化け物に対抗するための、何か。
ならば私の役目は、それを創る時間を稼ぐこと。

一歩も引くな、目を逸らすな。

（―私の後ろへは、一歩たりとも通すものかッ！！！）

後ろから聞こえるルークの呟き。
それがただ一つの希望のように思えて、胸の内から闘志が沸き上がってくる。
奮い立つままに、剣を抜き放ち、吼えた。

「このセシリー・キャンベルが相手だッ！　バケモノめ、かかって来いッ！！！」

＊＊＊

彼女の咆哮に応じるかのように氷獣はぶるりと体を震わせる。
目の前で鉄の棒きれを構える不遜な猿に、彼は例えようもない憤怒と憎悪を覚えた。

私は往かねばならないのだ、あの憎き神の元へ。

切り裂き、喰らい付き、喰いちぎり、惨たらしく殺してくれる。
千の、万の肉片としてこの腹に収めてくれる。

そうしてこそ、この怒りと憎しみは鎮められるのだ。

だが、目の前には非力な猿が立ちはだかる。

（―私の邪魔をするなッ！！）

激情に身を任せ、彼は力を解き放った。
本能のままに体を震わせ、背負った氷柱（つらら）を撃ち放つ。
空へ向かって飛び上がる氷柱はやがて弧を描くように、重力に従って降り注ぐ。
腕を盾にするように構えた猿の体に、それは容易く突き刺さっていく。
青い氷が、真紅に染まっていく。

脆い、脆すぎる。

神への復讐を始める前の景気付けに、この猿も喰らってくれようか。
にやりと歯を剥いて浮かべた笑みは、しかし次の瞬間、凍りついたのである。

＊＊＊

「―柄収め！」

満身創痍。
そう形容するにふさわしい彼女の耳に飛び込んできた、おそらくは

締めの一言。
ぶつぶつとつぶやく彼の声が途切れ、後ろから膨大な熱気を感じ、セシリーはそっと振り向いた。

「ルーク…」

「セシリー・キャンベル。お前のおかげで問題なく完成した」

崩れ落ちそうになるセシリーの肩をそっと左手で抱くルーク。
静かに座らせる彼の右手には、熱気を放つ赤い刀が収まっている。
その間も、彼は氷獣を睨み付ける目を逸らさなかった。

「今度こそ俺に任せてもらおうか…行くぞッ」

そう言い放ち、彼は剣を構えて一気に踏み込む。
すり足で地面を抉りながら疾駆するその姿は、まさに放たれた矢の如く。
身を屈めて撃ち放たれる氷塊から身をかわしつつ、彼は自分の間合いに持ち込み、無造作に剣を振り下ろした。
常人ならば見ることすら叶わぬほどの速度で繰り出された斬撃。
尋常ならざる熱をすら伴っているその一撃は、氷獣にとっては文字通り致命的なものだったのである。

身を守るべく氷の剣山で防御しようとする氷獣の体に、赤熱した刀身が迫る。
膨大な熱で氷の剣山を溶かして突き進む刃は、その速度をいささかも鈍らすことなく、氷獣の体に食い込んだ。
吹き荒れる蒸気が彼の肌を焼く。
しかし彼はそれを気に留めることもなく、剣を振り回す。

右から左へ。左下から右上へ。
腕を切り落とし、肩を抉り。
足を払い、剣山を弾き。

仕上げとばかりに剣を振りかぶった彼は、真向から氷獣の額を断ち割る。

＊＊＊

熱く燃える刀の熱に、獣の体を構成していた氷は一瞬にして融解、蒸発。
無数の斬撃を受け、辺りはもうもうと蒸気が舞っていた。

びしびしと亀裂を走らせ、崩壊していく氷獣。
それに目を向けることすらなく背を向け、ルークはセシリーとリサの元へ歩み寄っていく。

（―凄い…！）

セシリーは目を見張っていた。
ルークの刀の威力もそうだが、何より彼の剣の腕。
自衛騎士として毎日鍛練に励んでいる彼女ですら及びもつかない程、その剣筋に歪みも迷いもなく、何より速かった。
本来ルークは刀鍛冶、独立交易都市公務員三番街自衛騎士団所属の騎士たるセシリーにとってみれば、守るべき対象である。
その彼に剣の腕で負けているのは悔しくも情けなくもあったが、そんなつまらない感情など吹き飛ばすほど彼の強さは衝撃的で、その舞を思わせる剣は美しかった。

ふと、胴に違和感を覚えて体を見下ろすと、細い腕が巻き付いている。
地面にへたり込んでいた彼女の体を抱くように支えていたのは、ルークの弟子のリサだった。
そっと細腕に触れると、後ろからくすぐったそうにウヒヒッと声が上がる。
緊張感も何もないその声に、思わずセシリーは苦笑を浮かべた。
「…ふぅ、重労働だった。報酬は弾めよ、セシリー・キャンベル？」
事も無げに平然と言い放つ彼の顔にはしかし、濃い疲労の色がある。
全く、どこまで人を驚かせるのか。
そんなことを思い苦笑したセシリーは、彼に答える。
「あぁ、あの悪魔を殲滅したのは貴方だからな。私から騎士団にそう報告し―」
しかし、その言葉は不意に途切れる。
横手の茂みからガサガサと草擦れの音。
「誰だッ！？」
鋭く誰何の声を発するルーク。
セシリーは思わず身を強張らせた。
リサは慌てて腕を離して立ち上がり、セシリーを守るように立ちはだかった。
「ちくしょう…畜生がっ…！
お前らさえ来なきゃすべてうまくいったってのに…！
もういい…どうにでもなれだ…せめててめぇらだけでも殺してや

らぁッ！！！」

呪詛をまき散らしながらふらりと草むらから這い出てくる男。
見れば、腕を切り裂かれて血を流している。
おそらく、討ち漏らした盗賊の一味だろう。
狂乱しているようだが、何かしらの情報は得られるかも知れない。
幸い敵はもはや一人、ルークがいれば捕縛は容易い。

「ルーク、奴は殺さず捕え―」

しかし、セシリーの声は途中で凍りつく。
二度と聞きたくないつぶやきが、またしても聞こえてきたから。

「……」

不意に、男の体に穴が開く。
血を吹き出すでもなく不自然に開いたその穴からは、男の向こう側に広がる森の緑色が見てとれる。
ぼす、ぼすと気の抜ける音を上げ、男の体に穿たれる穴は数を増やしていった。
男は白目を剥いてだらしなく開いた口を開け、涎を垂らしている。
彼は完全に正気を失っていた。

「クソが…また悪魔契約か！
大体さっきの奴もこいつも、どこで自分の死言を知りやがった！
一日に二体も悪魔と戦えってのか。割に合わんにも程があるぞ！」

彼は既に現れた氷獣を倒した。
傷こそ負っていないものの、あの不思議な熱を帯びる刀を創るのはそれなりに消耗するらしく、彼の顔には疲れの色。

加え、先ほどの盗賊共、および氷獣の攻撃によって仲間は全滅している。
そしてセシリーは満身創痍、リサはそもそも戦闘などできない。
戦えるのは消耗したルーク一人。
逼迫した状況を前に、彼の声には焦燥の色が浮かぶ。

「リサ、セシリー・キャンベルを引きずって都市へ逃げろ！　俺は残って悪魔を何とかする！」

「ルーク、でも…」

「そうだ、貴方一人残すわけには…！」

「ガタガタ抜かすなッ！全員揃って死にたいのか！
俺一人の方が身軽なんだ、いいからさっさと行け！
奴を倒すか逃げるかして意地でもウチに帰るから、お前はさっさと帰って待ってろ！」

口々にルーク一人を残すことを拒むリサとセシリー。
それに焦れたようにルークは唾を飛ばして怒鳴る。
そうこうしているうちにも悪魔契約は進行し、とうとう男の体は穴に食い尽くされて、消えた。

「クッ…もう終わりやがった…伏せてろ！！」

逃走はもう間に合わない。
そう判断したルークは、刀を構えていつでも飛び出せる態勢を整える。
この状況では長期戦は不可能。
現れた瞬間を、一刀のもとに斬り伏せるしかない。

あるいは、ここで死ぬかもしれない。

その覚悟を、ルークは決めた。

＊＊＊

弾ける閃光。

次に爆発…が起こるはずだった。

しかし、爆発音はなく、爆風が来ることもない。

爆発に備えて構えていたルークは、訝しげに目を細めて光源を見やる。

うねうねと形を変えて固まっていく光。

明らかに、通常の悪魔契約とは違う現象が起こっているように見えた。

一体何が起ころうとしているのか。

攻撃の態勢が疎かになっているのにも気づかず、彼は光を茫然と見つめていた。

不意に、光が人の形を成し、次の瞬間、弾け飛んだ。

「…ッ、来るぞ！気をつけろッ！！」

契約が、終わった。
その事実に彼は我に返り、構えなおして後ろの二人に檄を飛ばす。
背後から身構える気配がする。
彼は、光が消えつつある前方を見やる。

「…何だ、あれは？」

そうつぶやく彼の間抜け面は、後にも先にも二度と見れないものであった。

彼女の弟子は後にそう証言し、次の瞬間師匠の拳骨を貰ったというが、それは余談である。

第二話

報告書。任務内容、帝国との国境付近に現れた盗賊一派の拠点捜索、および討伐。
報告者。独立交易都市公務員三番街自衛騎士団所属、セシリー・キャンベル。
討伐隊編成。三番街自衛騎士団員五名、傭兵十七名。

○月×日、帝国との国境付近に盗賊が現れたとの市民の通報を受け、自衛騎士団はこれを討伐することを決定。
三番街自衛騎士団が討伐に当たるとの騎士団首脳部の通達を受け、三番街自衛騎士団長ハンニバル・クエイサーの命により自衛騎士五名を選抜、これが傭兵十七名を率い、△日に都市を出発。
傭兵の協力を得て盗賊一派の拠点を発見し、討伐戦を開始。
盗賊は人外を操るも、傭兵の協力を得て人外を殲滅。
追い詰められた盗賊団首領と思われる男が悪魔契約を行使。
これによって生まれた悪魔（仮称”氷獣”）は騎士団員四名、傭兵十五名、盗賊数十名を殺害するも、生き残った傭兵の手によってこれを殲滅。
その後、生き残った盗賊が現れ、またも悪魔契約を行使。
しかし生まれた悪魔（仮称”魔人”）は深く眠っており、生き残った騎士一名および傭兵二名はこれを捕縛、都市へ連れ帰った。
現在、悪魔は都市地下牢に投獄され、厳重な封印・監視下に置かれている。
以上をもって、報告とす。

追記一。盗賊は人外を薬によって操っていたと生き残った傭兵の一名が証言している。
追記二。魔人は悪魔契約によって現れたが、ごく普通の人間と変わ

らぬ容姿をしている。身体的特徴も間違いなく人間であることを示していることが都市在住の医師によって確認された。
追記三。魔人は道具、および刀剣を所持しており、これは鍛冶道具、および刀であることが都市在住の鍛冶師によって確認された。
追記四。魔人は☆日現在、なお昏睡中である。
追記五。盗賊の人数に関して、報告と実数との間に差異が見られたことから、脱落者ないしは別働隊があったと推察されるも、詳細は不明。更なる被害が及ぶ可能性があるため、追調査の必要が認められる。
追記六……

「ふぅ」

ペンを置き、セシリーは息をついた。
何度も何度も推敲し、書き直し、ようやく提出しても恥ずかしくない出来に仕上がった。
やはり、文を書くのは苦手である。
生き残った自衛騎士が彼女一人であるため、必然的に報告する役割が彼女に回ってきたのだ。
まさか、雇っただけのルークやリサにそんなことをさせるわけにもいかない。
何より、そんなことをすれば団長の文字通りの「鉄拳」を貰う羽目になる。
そんな展開は御免だった。

「あらら。お疲れ様ね、セシリー」

そう声をかけてきたのは、同僚のパティ・ボルドウィンである。
公務役所に勤める彼女はセシリーと同じく公務員であるが、騎士で

はないので戦闘員でもない。
セシリーが騎士団の制服と鎧を纏っているのに対して、パティは公務員の事務服である。
鳶色の目に、同じく鳶色のショートヘア。丸眼鏡をつけたその風貌は十人中九人は美人であると評価するだろう。
口元の黒子がチャームポイントである。

「あぁ、パティ…お疲れ様。
やっぱり私に事務は無理だ、向いてなさすぎる。
剣を握っている方が楽しいし、第一考えなくていいから楽でいい」

苦笑してそう言うと、パティもまた苦笑を浮かべる。

「まぁ貴方らしいといえばらしいわね。けど…いえ、やっぱりやめておきましょうか。
今は女らしくしろって小言より、一仕事終えた貴方を労うことにするわ」

ちゃっかり小言を挟んでおきながら悪戯っ子のような笑みを浮かべてそう言う同僚。
女だてらに騎士なんぞをやっているセシリーをやっかみの目で見る騎士団員は多い。そうでなくても、好奇の視線は向けられるものだ。
だが、彼女は自分をそんな目で見ない。セシリーとしても等身大の自分で付き合える、彼女はそんな大切な友人であった。

「はは…ありがとう。
ところでパティ、何かあったのか？どうも役所内が騒がしいようだけど…」

そう言って回りを見ると、忙しく走り回る者達がちらほら。

それだけならいつもの事だが、有事の際に浮かべるような緊張感が漂っている。
武器や祈祷契約に使う玉鋼のチェックをしている者も多く、どうにも物々しい雰囲気であった。

「あらら、聞いてなかったの、セシリー？
報告書にそんなに集中できてたのなら、貴方にも事務員は務まりそうね」

「勘弁してくれないか、パティ…で、何があったんだ？」
冗談でとどまってほしい冗談に引き攣った笑みで答えつつ、重ねて問うセシリー。
それに答えたパティの顔は、いつになく真剣なものであった…などと言えば、彼女は憤慨したであろうけれど。

「実はね、ついさっき目覚めたらしいのよ…”魔人”が」

「とうとう動き出したか…！　すまないパティ、私は団長の所へ行ってくる！」

そう言い置いて、せっかく書いた報告書も持たずに飛び出すセシリー。
唖然とその様子を見送ったパティは、苦笑して床に落ちた報告書を拾った。

「あらら…相変わらず火の玉みたいな子だわねぇ。
あんなに慌てなくても大丈夫そうなんだけど…あの魔人、暴れる様子なんか欠片もないって言っておくべきだったかしら？」

最も、それを言う間も与えず飛び出したのはセシリーなのだから、パティに非は無い。
本来なら冷静さが欠けているという欠点になるが、彼女のそういう部分はしかし、嫌いではなかった。
パティは、出来の悪い妹を見る姉のような気分で、セシリーが走り去っていった方向を見やった。

＊＊＊

「…ここ、どこ…？」

優は目を覚ましてすぐ、自分が見知らぬ場所にいることに気が付いていた。

僕は鍛冶場で刀を打っていた。
焼き入れまでを終わらせて、師匠と話して、その後片づけでもしようかと…。

記憶は、そこで途切れている。
意識が途切れたという記憶すらない。
本当に、”気付いたらここにいた”のだ。
事実、彼は煤（すす）に汚れたツナギを着ている。あの鍛冶場にいたときと同じ服装だ。

辺りは薄暗く、少々手狭な部屋。
三方と上下を石壁に囲まれ、残りの一方は鉄格子になっている。

おそらく用足しのためであろう古臭くかつ悪臭を放つバケツ。
自分の体の下には粗末な寝台、体にはボロボロの毛布がかかっている。

これらの状況からするに…ここは、牢獄？

だがそれにしても腑に落ちない。
自分は犯罪など犯してはいないのだから牢に放り込まれる謂れは無い。
もっと言えば、この牢獄である。
どう考えても刑務所や拘置所では有り得ないのだ。
テレビのドキュメンタリー番組で刑務所や拘置所の特集が組まれることがあり、彼はそれを見たことがある。
だが、刑務所や拘置所はここまで不潔な場所ではないはずだ。
これでは中世の牢獄ではないか。
ついでに言えば、自分は裁判を受けた覚えが無いから、刑務所にいることはありえない。刑務所は懲役刑ないし禁固刑が確定した者が行く場所である。

訳が分からないが、とりあえず少しでも現状を把握しないといけない。
そう思った彼は、鉄格子に近づき、顔を押し付けるようにして周りを見た。
鉄格子の向こうに走る廊下。牢獄と同じく石造りで薄暗く、壁の燭台によって辛うじて照らし出されている。
廊下に置かれたテーブルの横には、椅子に座った男が一人。
腕と足を組んで顔を俯けている。
微かにいびきが聞こえてくるところからすると、どうやら眠っているようだ。

「あのー、すいません」

とりあえず彼に話を聞こうと、声をかける。

「んん…ふがっ！？　な、なんだ？」

いきなりかけられた声に無様に驚いて目を覚ました彼は、辺りを見回す。

おそらく牢番、ないしは看守なのだろうが…どうにもやる気のないことである。

「あのー、すいません」

さっきと全く同じセリフを繰り返し、彼は鉄格子から手を突き出して振ってみせる。

「ッ！？　魔人…！　目ぇ覚ましやがった！！　まずい！！」

心外な呼称を残して、彼は転ぶように走り去っていった。

「…魔人って。僕、そんなに怖いのかな…」

取り残された優は情報を得ることもできず、ただ凹むしかなかった。

「参ったな、どうしよう…」

頼みの綱だった看守が逃げ去ってしまったため、彼は今も訳が分からないまま。

しばし呆然とした後、仕方なく寝台に戻って腰かける。

盛大に軋むのがどうにも不快だったが、文句を言っても仕方ない。

彼が慌てて走り去っていった以上、おそらく誰かが来るはずだ。
魔人などと呼ばれたのは心外だったが、どうやら僕は彼らにとっては敵、あるいはそれに類する存在だろうということは感じ取れた。
これから待つのは取り調べの尋問だろう。
こんな場所に放り込むなどということは日本では考えられない。どころか、海外であってももう少しましな牢に入れるだろう。
なのに、看守の言葉は日本語だった。その辺りのギャップがどうも不可解である。

何にしても、ここから動けない以上、状況が変わるのを待つ以外にない。
そう思った彼は、とりあえず横になることにした。

＊＊＊

いつの間にか眠っていた彼を起こしたのは、廊下に響く低い声だった。

「ワシが見てくる。ヒューゴー、お前はここで待て。ワシが呼ぶまで近づくんじゃないぞ」

「分かっていますよ、ハンニバルくん。危なくなったらすぐ逃げますから。
　貴方も気を付けてください…彼は、我々の理解を越えている」

どこまでも真剣に交わされるその会話。
その中に含まれる人名らしき単語から、やはり自分は日本ではない別の場所へ来たのであろうことが感じられた。

ともあれ、これで状況が動きそうだ。
彼は、のそりと身を起こして、寝台に腰かける。
そしてじっと、近づいてくる足音を待ち受けた。

「…目を覚ましたようだな、魔人よ。
ワシの言葉が分かるか？」

鉄格子越しに話しかけてくるのは禿頭の大男。
顔に大きな傷を持つその男の体は隆々とした筋肉に覆われ、その外には時代錯誤としか思えない鎧を纏っていた。
顔の皺と顎の白い髭が、辛うじて彼が老人であることを主張している。
だが、首から下は精々３～４０代としか思えない立派な体である。
そのアンバランスが奇妙でありつつ、威圧感の元でもあるように優には感じられた。

「えぇ、分かります。
僕の名前は高倉優。なんで魔人なんて呼ばれるのかわかりませんが、優と呼んでくれると嬉しいですね。
貴方の名前を伺っても？」

「…悪魔とは思えんほど礼儀正しい奴だな…どうにも調子が狂うわ。
まぁいい。ワシの名はハンニバル・クエイサー。独立交易都市ハウスマンの自衛騎士団が一、三番街自衛騎士団の長を任されておる。
で…ユウとか言ったか。お前は、いったい何なのだ？」

どこまでもマイペースな優に引きずられるかに見えた彼は、しかし厳しい顔を崩さず問いかけてきた。
しかし、この問い方はどうなのだろう。

「何なのだ、って聞かれましても…僕は一介の刀鍛冶だ、としか言えませんね。
僕はさっき目を覚ましたばかりで、自分が置かれた状況が良く分からないのですよ。
牢獄に入れられていることからして、僕は何か罪を犯したんでしょうか？　そういう覚えはないのですけど…。
良ければ事情の説明をお願いできませんか？　僕は貴方や他の方に危害を加える気は毛頭ありません。　可能な限り対話を望みます」

「…ふむ…」

ハンニバルは考え込んだ。
見れば見るほど、ただの人間にしか見えない。
だが、タカクラ・ユウと名乗るこの男が、悪魔契約の結果として現れたことは事実。
ならば彼は悪魔ということになるのだが…無数の人外や悪魔を屠ってきた自分の戦歴にも、彼のような悪魔に出会ったことはなかった。
少なくとも、こいつには話は通じる。それを理解するだけの知能を持っている。
嘘を言っているとか、猫を被っているという可能性も無くはないし、こちらの寝首をかこうとしている可能性も無いとは言えない。

だが、半世紀以上も戦ってきたハンニバルの感覚は、こいつに敵意が無いこと、仮に襲ってきてもハンニバルどころか平の自衛騎士にも勝てないであろうことを告げている。
何より、彼が名乗った”刀鍛冶”という身分。
これは話してみる価値がある。彼は、そう感じた。

「…いいだろう。ではこれから我が独立交易都市の市長を呼ぶ。
念のため言っておくが…妙な真似はするなよ？　お前一人殺すことなどワシには造作もないのだからな」

怒気と威圧を込めた視線を向けられ、優は思わず震えた。

「…わかっています、ご心配なく」

絞り出すようにそう答える彼の声が震えていたことを笑える者は、世界にも数える程しかいないだろう。
歴戦の猛者が発する気は、それほどに重く、強いのである。

「よし…ヒューゴー！大丈夫そうだ、こっちへ来てくれ！」

優に頷き、横手に向かってそう叫ぶ。
それに答える声が聞こえ、数人の足音がこちらへ向かってきた。

現れたのは、ハンニバルと同じ服と鎧を纏った数人の騎士と、一人の男。
おそらく、彼が市長なのだろう。
他の者に比べて上質な服を纏っている。おそらく、これが正装なのだろう。
年齢は三十代後半くらいだろうか。顔はもう少し若々しいのだが、少し白髪の混じった彼の癖毛が、その印象を老けさせている。

口元に生やした髭が、どうにも似合っていなかった。

「初めまして…と言っておきましょう、ユウ。
先ほどの会話は一部始終を聞かせていただきました。
改めて、私が独立交易都市市長、ヒューゴー・ハウスマンです」

優しげな笑みを浮かべる彼の目はしかし、笑ってはいなかった。
こちらを見透かそうとするその眼光は、自分に気を許してはいない。
優はそれをはっきりと感じ、自分が置かれた状況の深刻さを感じた。

「初めまして…高倉優と申します。
話を聞いていらっしゃったのなら、重ねてお願いします。
どうか、事情を説明して頂けませんか？
ここは何処で、なぜ僕はここに居て、なぜ牢屋に入れられているのか…」

頷き、語り始めるヒューゴー。
しかし、その内容は優の想像を遥かに超えていたのである。

＊＊＊

「…嘘でしょう…とてもじゃないけど信じられない。
何です、独立交易都市って？　悪魔契約？　いつの時代の話です。
しかもその儀式で僕が生まれた？　つまり僕は悪魔ってことですか？
冗談だったら笑えないし、本気だったらなお笑えませんよ！」

茫然として、その後突如襲ってきた激情に身を任せ、彼は思いのた

けをぶちまける。
彼の怒気に敏感に反応した騎士たちが身構え、ヒューゴーを庇って武器をこちらに向けてくる。

「落ち着かんか馬鹿ども！
…まぁ抜いたものは仕方ない。だが下手に動くな、そのままヒューゴーを守っておれ」

騎士たちを一喝したハンニバルは、こちらに目を向ける。

「ユウよ、お前はこの話を冗談だと思うのか？
悪魔契約の存在は知らぬ者も多いが、祈祷契約ならば一般市民でも知っている。
まして独立交易都市の存在ともなれば一般常識に他ならん。
だが、お前はそれを知らんと言う。契約の術式を時代錯誤だ、有り得ないと怒る。
ならばお前はどこから来たと言うのだ？」

冷静に、かつ論理的に返されて、優は激昂した己を恥じた。
対話を求めておいてこれでは、信用を得ることなどできないではないか。
まずは、とことん冷静に話し合うこと。情報を得て、自分の事も伝えること。
自分が相手を信じなければ、相手にも信じてもらえないのだから。

「…どうやら僕と貴方がたの持つ”常識”には、大きな隔たりがあるようですね。
まずそこから正していく必要があるようだ…。
分かりました、お話ししましょう。といっても、やはり僕にとっては”常識”でしかない話なのですが…」

そうして、彼は語り始める。
自分が日本にいたこと。そこには悪魔契約も祈祷契約もなく、悪魔などというものは空想の中にしかない存在であること。
科学が発展した時代に生き、そこで自分は刀鍛冶の仕事に魅せられ、ひたすら修行に打ち込んでいたこと。
知的好奇心を刺激されたらしいヒューゴーの質問攻めを受けて話が逸れることも多かったが、その全てに優は真摯に答えたのである。

そして、どれほど対話を重ねただろうか。
話すこともなくなったように思われた頃、ヒューゴーが胸襟を開いてみせた。

「…どうやら貴方は異邦人のようだ。少なくとも、悪魔ではない。
貴方が牢の中にいるのは、偏に貴方が”悪魔契約によって現れた”こと、その一点のみが原因。
しかし、貴方に害が無いとなれば、むしろ貴方を牢に置いておく方が問題になりますし、貴方が有益な存在であるならなおのこと。
そして、貴方にはその可能性がある」

「…僕が有益な存在である可能性…ですか？」

「…そういうことか。ワシも考えんではなかったが…しかし少々性急なのではないか、ヒューゴー？」

「そうかもしれませんが…とりあえず確かめてみたいのですよ。
君、アレを持ってきてくれないか」

騎士の一人に何かを命じる。
走り去る騎士を見やって、彼はこちらに目を向けた。

「悪魔契約によって貴方が現れた際、いくつかの品も同時に現れたようでしてね。
それを貴方に見てもらいたいのですよ。今取りに行かせましたので…おっと、来たようですね」

「お待たせしました市長、これですね？」

「えぇ、これです…ありがとう」

律儀に騎士に礼を言って、彼はその品を受け取り、優に見せる。

「これが貴方と一緒に現れた品です。…見覚えは？」

それは、まぎれもなく優の愛用していた鍛冶道具である。
それに、打ったばかりの刀も一緒にあるではないか。
持ってきた覚えはないのだが、何故…。

「えぇ、あります。その道具は僕が愛用していた鍛冶道具、その刀は僕がここへ来る直前に焼き入れした、つまりは僕が打った…」

「やはりそうですか！」

歓喜の声に言葉を断ち切られ、彼は面食らったようにヒューゴーを見やった。

「な、何ですか突然？」

「この刀です！やっぱり貴方が打ったものなのですね！」

「え？　…えぇ、それは僕が打ったものですけど…それが何か？」
悪魔だの悪魔契約だのが実在するらしいこのファンタジーな場所に生きる彼が何故刀にこうも興味を示すのだろう。
というか、彼は刀を知っているのか？これは日本特有のものなのだが…何故？
さっきから疑問しか感じていないのだが、この状況では仕方ない。

「何かではありませんよ！大した出来ではありませんか！我が都市が擁する刀鍛冶（ブラックスミス）のそれに勝るとも劣らない！
貴方の力を借りられれば、聖剣を打つことも叶うかも知れない！」

ブラックスミス？せいけん？
一体なんの話か、やはり分からない。
ブラックスミスというのはファンタジーのゲームなどで見た覚えがある単語である。確か武器職人とか刀鍛冶とかを指す用語だったか。
せいけんを打つ、というのは…政権じゃないよなぁ。まさか聖剣？

「えっと…一体何の話でしょう…？」

「あぁ、失礼…つい熱くなってしまいました。
お話しましょう、世界の状況と、聖剣の役割、その重要性について…」

そしてまた、長い、長い話が始まる。

第三話

「いい？始めるわよ？」

「えぇ、お願いします」

確認してくる彼女に頷き返すと、彼女もまた頷き、玉鋼を手に呪文のようなものを唱える。
玉鋼を持つ手の指先に、小さな炎が灯った。
それを見て、彼は息を吐いた。

…やっぱり、ここは地球じゃないんだ…。

彼は対話の末に牢から出されることになった。
監視付きではあるし、何かの条件もつけられるらしいが。
ともあれ、状況は大きく前進したのは間違いないのだ。

彼は牢から出るにあたって、一つだけヒューゴーに頼みごとをした。
”祈祷契約を一度見せてほしい”と。
それは、科学に満ちた地球で生きていた彼にとっては、一つの区切りとなるはずであった。
自分は見知らぬ世界に放り出された。帰る方法など検討もつかない。
だが、どこであろうと生きねばならない。
もう師匠はいないけれど、師匠を超えるという夢は叶えてみせる。
そのために。この世界で生きるという現実を受け入れるために。
それが、一つの儀式であった。

「あらら。あんまり驚いてないみたいだけど…どうかしら？
初めて見るんでしょ？祈祷契約は」

好奇心を湛えた目を向けてくる彼女―パティ・ボルドウィンさんというらしい―の声に我に返り、返事をする。

「あ、えぇ…すごいですね…まさか玉鋼でこんなことができるとは…」

「あらら。祈祷契約を知らないのに、玉鋼の事は知ってるのね？どうして？」

やはり好奇心旺盛らしい彼女に好感を覚えつつ、僕は答えた。

「仕事柄、玉鋼はよく扱うんですよ。鍛冶師ですのでね。ただ、こんな使い方は知りませんでしたけど」

「へぇ…鍛冶屋さんなの？　まぁなんにせよ、魔人の汚名は晴れたようだし、良かったじゃない。
…ねぇ、セシリー？」

「…へ？　あ、あぁ…そうだな」

いきなり話を振られた女性騎士、セシリー・キャンベルさん。
彼女は、市長室で市長とハンニバルさんと話していた所に駆け込んできた自衛騎士の一人だそうだ。
魔人が目覚めたと聞いて飛んできたようだが、僕を交えてほのぼの話している状況に唖然とし、そのまま成り行きで僕の監視役に収まることになったのであるが、それはさておき。
さっきから彼女はぼーっとこちらを見ていたようだったが、どうしたのだろう。

「何ぼーっとしてるのよ、セシリー。
確かにユウさんは可愛くって礼儀正しくて弟にしたくなる良い子だけど、初対面で見惚れちゃうのはちょっとはしたないんじゃないかしら？」

思いがけず美人からそんな評価を受けて思わず顔が赤くなる。
見れば、セシリーさんも顔を赤くして喚いていた。

「バ、バカを言うなパティ！誰が見惚れた誰がッ！わ、私はただルークと同じ仕事をしているんだなぁと…」

わたわたと慌てた様子で手を振り、唾を飛ばして否定する。
それはそれで複雑な反応ではあるのだけど、それはさておき。

「ルーク…さん？　ヒューゴーさんが言っていた”都市が擁する刀鍛冶（ブラックスミス）”ですか？
お知り合いなら、是非一度会ってみたいですね。刀鍛冶として、この国の刀を僕も一度見てみたい」

そう言う優に、話が逸れてホッとした様子のセシリーが答えた。

「あ、あぁ…そうか。そういえば団長からユウとルークを顔合わせさせておけと言われていたっけ。
何故魔人を…と思ったのだが、そういうことだったんだな。
分かった、私についてきてくれ。
…じゃあな、パティ。また後で」

そう言い残してそそくさと去るセシリーさんの耳がまだ赤いことに気付いた僕は、浮かんでくる笑いを押し殺してパティさんに一礼し、彼女のあとに続いた。

＊＊＊

「あ、セシリーさん、ちょっと待ってください」

ふと思い出し、彼女を呼びとめる。

「ん？どうしたんだ、ユウ」

刀鍛冶の所へ行くなら、僕の刀を見てほしい。

そう思い立ったのである。

この世界の歴史をヒューゴーから聞き、聖剣と呼べるほどの刀がどうしても必要であることを知った。

その刀作りを担っている刀鍛冶と僕が出会うことを市長が望むのであれば、それは技術交換を行えと言っているのだと僕は解釈したのだ。

ならば、現物を交えて行った方が都合がいいのは言うまでもない。

事情を話して、ハンニバルさんに預けてある刀を受け取っておきたいのだ。

その旨をセシリーさんに話すと、彼女はそれを快諾する。

「分かった、そういうことなら私が団長に話を通そう。

団長室はこっちだ、ついてきてくれ」

…

……

……

「なるほど、そういうことか。いいだろう、この刀はセシリーに預けておく。
　自衛騎士でもない者が武器を持って町をうろつくのはあまり好ましいことでもないからな…ユウ、悪く思わんでくれ」

セシリーから事情を聞いたハンニバルは、刀を預けることを承諾してくれる。
理由もさりげなく付け加えてはいるが、恐らくそれは本音ではない。
まだ僕を信用しきってはいない、それが原因なのだろう。
監視付きの身分なのだから、武器を預けるなら監視役に。当然の判断だ。それに…。

「えぇ、分かっています。セシリーさんが持っててくれるなら安心ですからね」

にこりと笑ってそう言うと、セシリーさんはまた赤くなる。

「い、いきなり何を言うんだユウ！いいから早く行くぞっ！」

彼女をからかうのが好きらしいパティさんの気持ちが良く分かる。
彼女は照れ屋で、すぐ感情が顔に出る上、面白いくらいよく反応してくれるのだ。
そんな素直さが、とても好ましく、可愛い。

「ふふっ、すいません…じゃあハンニバルさん、行ってきます。また後で」

「うむ、行って来い…気を付けてな」

僕を信用していなくとも、仮に上辺だけであろうとも、そう言ってくれる彼の心遣いが嬉しくもあり、寂しくもあった。

＊＊＊

「これが独立交易都市…賑わってますねぇ」

「そうだろう。伊達に都市国家として繁栄しているわけじゃない。ここへは各地からあらゆる産物が持ち込まれ、そして流れていく。世界の物流の拠点、それがこの独立交易都市なんだ」

誇らしげに笑ってそう言うセシリーさんの声には、確かな誇りが感じられた。

この人も、信念を胸に生きている。

やはり、そういう人は好ましい。

町行く人々にも笑顔があふれ、あちこちで露店を出している者達が客引きの声を上げている。

「ところでセシリーさん…ルークさんってどんな人なんです？」

ふと浮かんだ疑問をセシリーにぶつけてみる。

「ん？ルークか…そうだな、一言で言えば無愛想な男だな。笑っている所はほとんど見たことがない。年は私と同じくらい。

リサという少女を弟子にして二人で鍛冶屋を営んで暮らしているんだが、これが人嫌いらしくてな。

客の注文を受けるのもほとんどリサがこなしているらしい。

だが、刀鍛冶としての腕は超一流と言っていいだろうな。

私もルークの刀に魅せられたクチで、彼に刀を打ってくれと頼んでいる所なんだ。まぁ刀の注文は受けないと言われてしまったがな。

ついでに言うと、腹立たしいことにルークは剣士としても超一流だ。私よりずっと強い。

何でも、同じく刀鍛冶だった父に剣を教わったらしいよ…刀鍛冶たるもの、武器の扱いにも精通していなければならない、という教えでな」

何と言うか、いかにも職人気質な人らしい。

師匠もそんな人だったから良く分かるのだ。

極めようとすればするほど、自分にも他人にも厳しくなる。

最も、自分の場合は生来の気質からそうはならないのだけれど。

「そうですか…それは会うのが楽しみです」

本心からそう言って笑う僕を見るセシリーさんの目は、如実に”変な奴だ”と語っていた。

心外だ。別に偏屈な人が好きな訳じゃない。彼の打つ刀に出会えるのが楽しみなだけなんだ。

第四話

独立交易都市は、都市というより都市国家と言うべき規模を誇っている。
かつて、街の開祖たる初代ハウスマンが代理契約戦争（ヴァルバニル）によって大陸に溢れ返った難民たちに呼びかけ、これを率いて開拓したのが今の独立交易都市であるとされる。
数十年を経て、この都市は大きく肥大化し、今では七つの区画に分かれ、それぞれを「番街」と呼称している。

工房『リーザ』は、このうちの七番街に位置していた。

七番街は厳密には街と呼べる場所ではない。
ほとんどが農地で占められているからである。
都市が人を雇って維持・管理・運営している巨大な農地。
ブレア火山の灰が降り積もる灰かぶりの森の傍に広がるここは、のどかな田園であった。

「大きい農地ですね…端っこが見えない…ここ全部七番街ですか…」

半ば茫然とした様子で、足を進めつつも優はつぶやく。

「そうだ、この農地全てが七番街に含まれる。といっても、街というよりは農地と少しの民家しか無いのだが。
お、見えてきたな。分かるか、あの看板が『工房（アトリエ）リーザ』だ。あそこにルークとリサが住んでいる」

そう言うセシリーの指の先を目で追ってみれば、一軒の民家が見えた。

古びた板張りの家。大きさはそれなりであるが、風雨に晒されて黒ずんでいる上、壁には蔦が伸びている。
知らない者が見れば廃屋だと勘違いしてもおかしくはない。

不意に、その家の脇からキラリと光る何かが飛び出してきた。
ぱたぱたと音が聞こえそうなくらい忙しく動き回るそれは、よくよく見れば金色の髪をした少女である。
洗濯物を干しているようだ。
あっちへぱたぱた、こっちへぱたぱた。
まるで小動物のような動きが微笑ましく、その働きぶりが健気にも思えた。

「留守ではないようだな、良かった。あの子がルークの弟子のリサだ…
　おーい、リサー！おはよう！！」

大声で呼びかけられて、彼女もこちらに気付いたらしい。
満面の笑顔を浮かべ、両手をぶんぶか振りながらこちらへ走ってくる。
懐いてくる犬を連想させるような姿、しっぽの代わりに腕を振っている、そんな風情である。

「おはようございマース！セシリーさん！！　…あれ？」

どうやら僕に気付いたようで、彼女は途中でその足を止める。

「そちらの方は…あの時の…」

怯えた風なその様子。大丈夫だよ、と伝えたくて、僕はふわりと笑ってみせた。

どこか陰のある残念な笑みであったろうけれども。

「あぁ、リサ。彼が今朝方目を覚ましてな。
市長と団長が話した結果、危険は無いと判断されて監視付きではあるが釈放されたんだよ。
心配ない、話の分かる奴だから。
…改めて紹介しよう。彼の名は高倉優」

「初めまして、リサさん。高倉優といいます。優って呼んでくださいね」

にこりと笑ってみせる。今度は残念な笑みではなかったはずだ。

「ハイ…私はリサといいます！よろしくお願いしますネっ！」

セシリーの紹介に安堵したのか、弾けるような笑みを見せてくれる。やはり、女の子には笑顔が似合う。まして、このくらいの歳の子ならば、なおさら。

「ところでセシリーさん、今日は一体どうしたんです？
…あ、こないだの刀の件ですか？ルークはまだ寝てますけど」

「あぁ…そういえば彼に刀を打ってくれと頼んだんだっけ…ゴタゴタしてて忘れてたけど。
…いや、それもあるんだが、今回はユウとルークの顔合わせをさせに来たんだ。
彼も刀鍛冶らしいんでな」

セシリーの言葉に、リサは驚いたように目を剥いた。

「ふぇ？刀鍛冶なんですか、ユウさんって？
それは楽しみデス私もお話聞きたいデスユウさんの刀見たいデスルーク起こしてきますデスついでに朝ごはんにしますデス！！
ルゥークゥー！！お客さんデスよ起きてくださいよご飯できてますよお腹すきましたよ面白い話聞きたいデスよぉーーーーー！！！！」

マシンガンのように話すだけ話して叫びながら、母屋に併設された作業場と思しき小屋へ突進していくリサ。
まさか救急車も消防車も無いこんなところでドップラー効果を体験するとは思わなかった。

「はは…相変わらずだな、リサは…さ、行こうか、ユウ」

どがんどがんと扉を叩く音。ルークを起こそうとひたすら扉の前で喚くリサの声。
何とも騒がしいが、気にせず母屋へ向かうセシリーの後に続く。
勝手知ったる我が家とでも言わんばかりに平然と今の椅子に腰を下ろすセシリー。
たぶん大丈夫だろうと、自分もそれに続いた。

「ほらほらルーク！こっちこっち！！」

リサに腕を引かれてのそのそと居間へ出てきた少年。
寝ぼけ眼に髪はボサボサ。乱れた寝巻は胸あたりまで開かれ、無造作に腕を突っ込んでぼりぼりと肌を掻いている。
どうやら、寝起きは相当に悪そうである。
一言も発することなく彼は席について、ぼけーっとこちらを見つめている。

「おはようルーク。今日は彼を紹介しに来たんだが…その様子では

朝食もまだなんだろう。
　リサ、先に済ませたらどうだ？私たちは待っているから」
「じゃ、せっかくですしそうさせてもらいましょうか…その頃にはルークの目も覚めてるでしょうし。…ごはんごはーん！！」
小躍りしながらキッチンへ駆けていくリサ。
よっぽどお腹が空いていたのだろう、その口元から垂れそうになる涎を拭いながら駆け行く様に笑いそうになる。
そして、騒がしくも楽しい朝食が始まった。

＊＊＊

…といっても僕とセシリーさんは既に済んでいる。
リサさんが淹れてくれたお茶を楽しみながら、二人の食事風景を微笑ましく眺めていた。

ずずっ、と一口。
熱いお茶が口、喉、そして胃へと流れ込んでいく。
口で痛みを伴った熱さを、喉でカッと焼けるような熱さを味わった後、胃の内側から体を温められる感覚を楽しむ。
ほぅ、と一息。
余り馴染のない口当たりがする。濃厚でコクのある味わい。不思議と落ち着く感じが好ましい、そんなお茶だった。
「こんなおいしいお茶は久しぶりですよ、リサさん」

「うまうま…そうですか？良かったデス！…うまうま…灰かぶりの森で採れた葉を煮出したお茶なんデス！うまうま」

目玉焼きと刻んだ野菜をパンに挟んだサンドイッチ。
ぱくぱくむしゃむしゃ笑顔で頬張りながら、僕の言葉に喜ぶリサ。
さっきは犬のように感じたが、今度は頬いっぱいに食べ物を詰め込むリスそのものである。
対するルークはもそもそとサンドイッチを齧ってはお茶で流し込んでいる。
大分目は覚めてきているようだ。

…

「ふぅ…で、なんでお前らがここにいる」

ルークがようやく口を開いたのは、食事を終えて一服終えた辺り。
リサが食器を洗い終わって戻ってきた頃であった。
何とも愛想のない一言であったが。

「何だ、私たちがここにいては不味いのか？言いたいことがあるなら率直に言ってもらいたい」

「帰れ」

「率直すぎる！！
…私は、ルークに彼を会わせるために来たんだ。
彼の名はユウ。知っているだろうが、件の悪魔契約によって現れた。
役所の地下牢に投獄されていたが、市長と団長が話した結果害はないと判断され、釈放された。

聞けば彼も刀鍛冶だというのでな、ルークと有益な情報交換ができるかもしれないと期待されて、私が顔合わせの仲介をするよう仰せつかったのだ」

「ほぉ…刀鍛冶ね。俺はまたてっきり、人間の彼氏ができないから悪魔を彼氏にして見せびらかしうぉっ！？」

そこで彼の言葉は強制的に止められた。

「一度死んでみるか？ルーク」

彼の喉元にはいつの間にか抜かれた僕の刀。
抜いたことにすら気づけなかった彼女の早業。しかし、目の前のルークさんの腕はそれを超えるという…。
一体彼はどんな技を持っている剣士なんだろう？
ギャグ補正だということすら気づかぬユウは、どこまでも真面目な男であった。

「死ぬのは御免だ…悪かった悪かった。で…この刀、こいつが打ったものか？」

「あ、はい…まだ焼き入れが済んだ段階で、仕上げ研ぎまではしてないんですけど」

突きつけられた刀を舐めるように見る彼の目は、どこまでも真剣である。
どんな小さな曇りも見逃さない、そんな透徹な目であった。
どう評価されるのだろう。僕の期待は膨らむばかりである。

「…ふん。これで刀鍛冶、か？こんな腑抜けた刀を打っておいて、

良く言えたもんだ」

だが、その期待は一気に萎むことを余儀なくされた。
彼の目は如実に”期待外れだ”と言っている。

「ルーク、それが初対面の相手に言うことか？
大体腑抜けた刀とは何のことだ。素人目に見てもわかるくらい見事な出来ではないか」

彼の言いぐさにむっとしたらしいセシリーが反論するが、彼の思いは変わらなかったようだ。

「確かに出来はいい。反りは見事、波紋も仕上げ研ぎを済ませていないことを考慮に入れて完成品の出来を想像すれば…。
だが…それだけなんだよ」

頭上にクエスチョンマークを浮かべているセシリーとリサ。
しかし、彼の言葉の意味は、僕には分かった。

「えぇ…貴方の言うことは分かります。鍛冶師だからこそ理解できる領域の話。
…これは、実戦用に打たれた刀ではない。腑抜けた刀とは、実戦では使い物にならない刀…という意味でしょう？」

僕の言葉に、ルークは嘲るような笑みを浮かべる。

「フン…分かってるじゃねぇか。だが、実戦用に打たれた刀じゃない、ってのはどういう意味だ。
刀は武器、それを実戦に使うことを想定せずに作るとはどういう了見だ？刀に対する侮辱とも思えるんだがな。

事と次第によっては…」

彼の目に剣呑な光が浮かぶ。
刀鍛冶としての腕を高めるために剣術をすら学ぶ彼にとって、美術品として打たれる刀など想像もできないのだろう。
僕は、その辺りの事を、言葉を選びつつ説明する。

「なるほどな…美術品としての刀か。戦のない世界ならそんなこともあり得るのかも知れん。
そういう意味でならお前の刀はかなりの逸品と言えるだろうな。
だが…実戦用の刀は打てるんだろ？そうでないなら二度と刀鍛冶を名乗るな、と言いたい所だが」

「打ったことはありませんが、どうすれば実戦向きになるかは分かります。
多分、打てる。いえ、一度は打ってみたいと思っていました。
ただ僕の祖国の法がそれを決して許さないので、機会が無かったのですけどね」

「…じゃあ、それ打ってから出直してこい。
話は終わりだ。…リサ、来い。仕事だ！」

「え…あ、ハ、ハイ！」

どうやら気を悪くさせてしまったらしい。
彼は不機嫌そうな顔を崩さないまま、さっと奥へ引っ込んでしまった。
慌てたリサがそれに続く。

「おい待てルーク！まだ話が…あぁもう！すまんユウ、ちょっと待

ってくれ！
おいルーク、待てってば！」
憤慨した様子でセシリーがルークたちを追って奥へ入っていく。
一人取り残された僕は、茫然と置き去りにされた自分の刀を見つめるしかなかった。

＊＊＊

（クソッ…クソがっ！）
ルークの胸に渦巻くのは、悔しさと、自分への怒り。
負けた。俺の刀は、あいつのそれに勝てない。
実戦用には使えない、そう評したあいつの刀はしかし、実戦用としては「ルークの刀に少し劣る」程度。
実は十分実用に耐えるものだったのだ。
あれで実戦用に打ったものではないなどと言われてしまえば…実戦用はどれほどのできなのか。
それが見てみたくもあったのだが、それ以上に「美術品として打たれた刀が、実戦用に打った俺の刀に匹敵する」という事実は受け入れがたいものであった。
俺は何をやっている。
自分を超える鍛冶が現れ、それを口汚く罵った。
自分の作を超える逸品たる刀を貶した。刀について、嘘を言った。

それで本当に、刀鍛冶と言えるのか。刀鍛冶だと胸を張って言えるのか？

（…言えるわけがないだろうがッ！！！）

陳腐な嫉妬に囚われた自分を、ルークは許せなかったのだ。
同時に、彼に勝ちたい、彼以上の刀を打ちたい。そんな渇望が胸に渦巻いていた。

脇でぎゃぁぎゃぁ喚くセシリーの言葉などもう耳に入らない。
ルークの頭脳は、次の、ユウの刀を上回るための刀、その構想を練っていた。

＊＊＊

腑抜けた刀。
その評価は、思いのほか僕の心を抉り取っていった。

自分でも、思わないではなかったのだ。

刀とはこんなものではない。本当の刀を打ってみたい。
そんな渇望は、常にどこかにあった。
鉄に命を吹き込みながら、もっともっと別の何かを求めていたのだ。

「人を斬るための刀」を。

別に、人殺しの片棒を担ぎたい訳ではない。
単純に鍛冶師としての、職人としての本能が叫ぶのだ。
実際に使われてこそ道具は道具たりうる。
実戦に投入されてこそ刀は刀たりうる。

それを求めずして何が職人、何が刀鍛冶か、と。

これでも、密かに自信があったのだ。
師匠には散々に罵られてきたが、内心僕に期待してくれていたのは分かっていた。
自分でも、まだまだ高みには届かなくとも、いずれ届くであろう才が自分にあることは感じ取れていた。

”おめーみてぇな出来損ないは、人の万倍金槌振るくらいで丁度いいんだ。”

師匠の言葉が脳裏に蘇る。
そして溢れる。悔しさが、胸に溢れ返ってくる。

悔しい。僕は、実戦に使われることのない刀を打って、その出来がいいと誇っていた。
職人の筋を無視した、道理から外れた誇りを振りかざしていた。決して表に出しはしなかったとしても。
高みを目指すという誓いを、一時でも違えてしまっていたのだ。

これでいいのか。
こんなことで師匠を超えるという夢を、高みを目指すという誓いを、果たせるというのか。

（…果たせるわけないじゃないかッ！！）

胸に溢れては脳を焼く、それは怒り。
自分に対する怒りであった。

ぎりりと噛みしめた歯は歯茎を軋ませ、握り込んだ手は爪に抉られる。
奥から聞こえてくるセシリーの怒声も気に留めず、彼はただ怒りを燃やしていた。

そこでふと、彼は傍らの壁に目を向ける…。

＊＊＊

この日、独立交易都市で二人の男が覚醒する。
後に歴史に名を残すことになる偉大な二人の刀鍛冶。
それが、とうとう胎動を始めた。

そのことを知る者は、まだ居ない。

第五話

壁に架かった一振りの刀。
白木(しらき)の鞘と柄を持ち、どことなく神聖な雰囲気を醸し出している。
これはルークが打ったものだろうか…そんな考えが優の脳裏をよぎったが、その考えはすぐに振り払った。
手入れは行き届いているが、鞘も柄も新しいものではない。
数十年の時を経てようやく得られる重厚感を、この刀は宿していたからだ。

おもむろに彼は壁の刀へ歩みより、手に取った。
ずしりと重いその刀を捧げ持ち、一礼し、傷つけぬようそっと抜く。
その刀身を覗き込んだ優は、感嘆の溜息をついた。

「…すごい…」

そうとしか言えなかった。

美しくけぶるように輝く刃紋には一点の曇りもない。
気高く反り返る様は、この刀を打ったことを誇っているであろう鍛冶の心持ちを表しているかのようである。
刃を垂直に立てて峰を腕に乗せるように構え、柄の側から覗き込む。
その刃には歪みらしい歪み一つすらなく、当然刃こぼれも無い。
次に自分に刃が向くように持ち、正面から刃筋を覗き込む。
そしてユウは、図らずも溜息を漏らす羽目になった。

…本物だ。

本当によく出来た刀というものは、刃先が余りに薄いため、正面か

ら覗くと刃筋が全く見えない。
まさしく、この刀のことである。
だが、一つだけ気になる点があった。
「…これは、甲伏せ拵えだな」
刀とは、いくつかの部材を組み合わせて作られる。
峰にはあまい（柔らかい）鉄を、刃につよい（硬い）鉄を用い、これらを合わせることで切れ味と丈夫さを両立させる。
よく切れるが折れやすい刃を、峰のあまい鉄が受け止める。これが刀を刀たらしめる秘密なのである。
だが、この部材の組み合わせ方にもいくつか種類があるのだ。
甲伏せ拵えはもっとも基本的かつ単純な形である。
U字型に鍛えたつよい皮鉄の間にあまい心鉄を挟み込む形で合わせ、鍛える形。
単純なだけに作りやすく手間もかからないのだが、それによって打ち上がる刀の質にはおのずと限界が生まれる。
逆に言えば、甲伏せ拵えによる刀の限界を極めた目の前の逸品は、凄まじい程の腕の持ち主によって鍛えられたものであるということだ。
原始的な構造でありながら、現代刀の技術を用いた構造で打った自分の刀を遥かに超えている。
例えるなら、弓矢でクロスボウ以上の威力を出すようなものか。
一方、ユウの刀は本三枚拵えで打ったものである。
峰には甲伏せと同様に心鉄を用い、刃には皮鉄よりもつよい刃金を

用いる。
そして、この二つの部材を、二つに分けた皮鉄で左右から挟み込んで合わせるのである。
これが、本三枚拵えだ。甲伏せとは比べものにならない程、切れ味と強度が向上する。

だが、これも現代刀における完成形ではなく、更にその上に四方詰め拵(こしら)えというものがある。
しかしこちらは部材が多すぎて折り返し鍛練に非常に時間と手間がかかる。
更に言えば、全て性質の違う各種の部材を完璧に融合させるという難業には、経験に裏付けされた確かなセンスが求められるのだ。
自分では経験不足だということで、知識としては知っていても実際に打ったことはなく、師匠からも本三枚を数多く打って経験を積むべきだと言われていた。

だが、高みを目指すなら避けては通れない関門。
四方詰め、まずは挑戦してみようか。

彼の頭は、更なる飛躍へ向けた準備に忙しく働いていた。

……
……
……

「…い」

まずは資金が要る。

「…い、…ウ」

それに場所も用意しなきゃいけない。あと、人も…。

「おい、ユウ！聞いてるのか、ユウっ！！」

「うひゃぁっ！？」

僕の思案は、耳元に響いた大声で中断を余儀なくされた。
軽い耳鳴りを鎮めようとこめかみから耳辺りを摩りつつ脇を見れば、
赤毛の騎士。

「あ、あぁ、セシリーさん…どうしました？」

呆けた顔でそう返すと、彼女の顔に呆れの表情が浮かぶ。

「どうしたって、それはこちらのセリフだ。
ユウこそどうしたんだ、私の声が聞こえないとは…考え事か？」

「えぇ、まぁ、ちょっと…」

我ながら歯切れの悪い返事である。

「ルークに言われたことなら気にすることは無いぞ。ユウの刀は素
晴らしい出来だと私は思う」

いたわるようにふっと笑みを浮かべ、彼女は僕の肩に手を置く。
女性特有の甘い香りに、僕は飛び退こうとする自分を無理やり抑え込んだ。

「あ、ありがとうございます…」

「ん？どうしたんだユウ、顔が赤いぞ？風邪でも引いたか？どれ…」

そう言って額を合わせようと近づいてくるセシリー。
今度こそ、僕は飛び退いた。

「な、ななななんでもありません全然平気です元気いっぱいですあはははっ」

「そうか？ならいいのだけど…。
本当ならまだルークに話があったんだが…考え事があるようでこちらの話に全く耳を貸そうとしない。
…はぁ、しょうがない、帰るか…顔合わせは済んだことだしな」

苦笑交じりにため息一つついて、僕らは連れだって工房リーザを後にした。

＊＊＊

「リサ、今来ている注文は！？」

怒鳴るようにそう問い詰めるルーク。
その目は血走り、いつになく燃えていることにリサは気づいていた。
それがおそらく「怒り」から来るものであろうことも。
何に対する怒りか、それは分からない。
ただ、主人の怒りが恐ろしかった。

「ふぇっ！？　え、えーと…五番街の軍国食堂さんが包丁作って欲しいって言ってました…。
　あと、近所のアンズーさんも今度一本見繕って欲しいと…」

震える声でそう返すも、ルークの様子に変化はなく。

「ストックの屑鉄を必要分出せ！明日の昼までに両方終わらせる！！」

鬼の形相でそう言い放つ鬼の言葉は、内容までも鬼だった。

「あ、明日の昼までぇ！？　いやでも、どっちも急ぎではないと…」

たかが包丁といえど、屑鉄から打ち上げるとなればそれなりに時間がかかる。
最も手間のかかる折り返し鍛練をしないと言っても、ある程度の切れ味は持たせる必要がある。
ただの屑鉄をそのまま打ってもどうにもならない。
錆びた部分を還元させ、炭素の混入した部分を落として、良質の鉄を得る。
それを砕いてから用途に合わせて選別し、成形して地金を作る。
そこまでやってようやく鍛練に入ることができるのだ。
最も、同じ包丁だから下準備の段階は二本分を同時進行させられる。
これで時間を短縮できるので、明日の昼までというのは不可能では

ない。ないのだが。

「向こうが急がなくてもこっちが急ぐんだ！時間が惜しい、さっさとやるぞっ！！！」

「あの、ルーク…？」

おずおずと問いかける。

「何だ、急いでると言ってるだろう！？なんか文句でもあるのかっ！？」

「い、いえ、文句なんて…ただ、どうしてそんなに急ぐのかなぁ、って…」

その問いかけは、主人の心に踏み込む問い。
リサにとって、一歩間違えば致命的となるものである。
主人の機嫌を損ねてここを放り出されてしまえば、自分にはもう行く場所などない。
だからリサは、どんな扱いを受けてもどんな理不尽なことを言われても、今までじっと耐えてきた。
主の心には踏み込まないようにし、常に一歩引いた距離を保ってきたのである。

「どうしてだと！？あんな刀見せられて黙っていられる訳ないだろうがッ！
観賞用に打った刀が俺の実戦用の刀に匹敵するだと？そんなもん認められるかッ！！
俺はあいつの刀を完膚なきまでに打ちのめす程の刀を打ってみせる！

包丁なんぞさっさと片付けて刀の鍛練に入りたいんだ、分かったかッ！！！」

血走った目で自身の激情を吐露する主人を、リサはポカンとした目で見つめた。

…こんなことは、初めてデス…。

ルークはあまり自分の事をしゃべらない。
自分の心中を人に知られることを嫌うタイプなのだ。
それが仮に喜びという感情であっても、彼はそれを表に出さない。
まして、それが自分の弱さを示す嫉妬心などであればなおさら。
そんな彼が今、自分の心を剥きだしにしている。
負の感情ではあっても、それは自分を更なる高みへ引き上げるためのもの。
そのとばっちりを食うのは自分だが。

それでも、嬉しかった。

心中を自分に明かしてくれたことが。

それが、激情に身を任せた勢いの結果であったとしても、だ。

自分とルークの間にあった狭くて深い溝が少しだけ埋まったことを、この時リサは感じ取っていた。

「明日の午後から刀の鍛練に入る！
折り返しは皮金、心金共に１５回！徹底的に鍛え上げてやるッ！！」

「じゅーごっ！！！！？」

喜びが、萎える。

くすん。私、倒れるかも知れません…。

第六話

田畑を通り抜けるのどかな農道。
見渡す限りの農場の遥か向こうに森と、更に向こうには高山の群れが見えている。
緑と、灰と、空の青と、雲の白。
織り出されるコントラストは、小さな悩みを吹き飛ばすような爽快感をもたらすものだった。

「そういえばセシリーさんって、ルークさんと知り合ってもう長いんですか？」

ふと、何気なくそう聞いてみる。

「いや、つい先日知り合ったばかりだよ。
この間の盗賊討伐行の顛末は話しただろう？
あの前に、街で暴漢とやりあったときにルークに助けられてな、その折に彼の刀を見て、それに惚れ込んだんだ。
で、彼に刀を一振り打ってくれと頼んだんだが、刀の注文は受けていないと断られてしまってな。
ならば私が刀を与えるに足るかどうか自分の目で見て判断してくれと頼みこんだんだ。
その場として盗賊討伐行を選んだ。彼にはそれに参加する傭兵としてついてきてもらったんだ。
…まぁ、それどころではなくなってしまったがな。あとはユウも知っての通りだ。
そんなわけで、まだ知り合って十日も経っていないんだよ」

「そうでしたか…」

刀の注文は受けていない、か。
彼の家で見たあの見事な刀は、年代から考えてまず彼の作ではない。
が、僕の刀を見てその本質を即座に見抜いた彼の眼力が、常日頃から彼が刀に触れていることを物語っている。
ましてそれが刀鍛冶である彼なのだから、刀を打っていないなどということはないはず。

「こちらでは彼以外に刀鍛冶はいないんですか？
彼に断られたのならほかの鍛冶に頼んでみればいいのでは…」

その疑問に、しかし彼女は首を横に振る。

「今の大陸では、刀剣は鍛造でなく鋳造によって量産されるのが一般的でな。
そもそも鍛造という技術そのものが失われつつあるのが現状。
だから、それを受け継ぐルークのような刀鍛冶は希少かつ貴重な存在なんだ。この都市では今の所彼一人だな。
鍛造された刀剣は、鋳造されたものとは比べものにならないほど丈夫でよく切れる。
聖剣の話は聞いたか？これも鍛造によって生まれたとされている。
鍛造技術を持つ刀鍛冶は、都市や国家そのものの財産となりうるんだ」

なるほど、そういうことか。
ハウスマンやハンニバルが、僕が刀鍛冶と聞いて目の色を変えたのはそれが理由か。
であれば、そこから都市にとっての僕の存在価値を得ていくことができるだろう。
監視役のセシリーは嫌いではないが、自由が制限されている現状は

少し窮屈でもあるのだ。

「そうでしたか、なるほど。
…セシリーさん、一つお願いがあるのですが」

一つの決意を胸に秘めて、彼女に語りかける。
彼女はきょとんとした表情でこちらに目を向けた。

「ん？どうした、改まって？」

「戻ったら、市長にお目通りを願いたいのです。取り計らってはいただけませんか？」

「市長にか…私は平の自衛騎士でしかないからな、本来は市長への取り次ぎなどできる身分ではないよ。
だが、団長に話を通すことならできる。団長なら市長への取り次ぎもできるからな。
まずは理由を教えてくれないか？団長を説得できれば市長にも会えるはずだ」

こくりと頷き、僕は話し始める…。

＊＊＊

「なるほど…刀鍛冶として活動するための地盤を整えるべく資金提供をしてほしいと…」

セシリーに連れられて面会の場へ足を運んだ優とセシリーは、ヒュ

ーゴー、ハンニバルと向き合って要望を伝えた。
内容は主に次の通りである。

一、独立交易都市は、優に市民権を付与し、優が刀鍛冶として活動することを承認し、またこれを援助する。
二、優は独立交易都市お抱えの刀鍛冶として、聖剣完成を最終目標に鍛練を行う。
三、聖剣鍛練の過程で打ち上がった試作の一部は、これを独立交易都市に進捗報告として提出、献上する。
四、都市は、優が都市への献上分以外にも刀剣類・生活用品を制作し、市民に売却することを認める。
五、ただし上記四項における刀剣類の売却は、都市の印可を受けた者のみを対象とする。
六、その他、優は独立交易都市市民として、都市の求めに最大限応じることとする。

「市長、団長、どうかユウに機会を与えてやってくれませんか」

セシリーもそう口添えしてくれた。
どちらにも利がある条件を提示したつもりだ。
聖剣完成は、都市だけでなく大陸全体の悲願である。
また、試作品の献上も向こうにとっては美味しいはずだ。

刀は霊体を切り払う”禍払(まがばら)い”と呼ばれる稀有な力を有している。
（これは牢獄で初めてヒューゴーと話した際に聞いたことである）
悪魔契約は、この世界の国家にとって（公にしてはいないにせよ）重要な戦力。
故に、国家間紛争を視野に入れるならば、悪魔の糧である霊体を切り払う刀の存在は、大きな対抗策となりうるのだ。
それだけでなく、聖剣と呼べるレベルでなくても、ヴァルバニル戦

において戦力となる可能性がある。それだけでも重要性は非常に高い。

つまり、献上された刀は、都市にとっては自国の戦力増強につながるし、場合によっては外交の場で交渉カードに使うこともできる、ということ。

高濃度の霊体という地理的要因を生かした高レベルの祈祷契約。それに必要な玉鋼の独占生産と流通管理。

それでなくてもこの都市は交易都市であり、その経済力は高い。

これらの切り札に、”定期的に手に入る刀”が加わる。

独立を標榜するこの都市にとって、外交戦略こそが命綱。

切り札が多ければ多いほど、都市の安全と安定が約束される。

”刀鍛冶が一人手に入る”という一粒の実は、噛み締めてやれば二度や三度ではきかない程の美味しさをもたらすのである。

むむむ、と唸るヒューゴーとハンニバル。

二人の目は、確かに目の前にぶら下げられた大きな国益を見つめている。

費用対効果で見るまでもなく、これは魅力的な提案であった。

「ヒューゴー、こんな美味い話はそうそう無いのではないか？　ワシはこちらから頼んででも受けるべきだと思うぞ」

そう言うハンニバルに、しかしヒューゴーは難しい顔を崩さなかった。

彼の提案は確かに魅力的だ…いや、むしろ蠱惑的とすら言えるほど都市にとってはありがたい。

だが、それ以上に彼の存在が恐ろしくもあった。

彼は、都市から見たこの提案の魅力を承知した上でこの提案を持っ

てきたのだろうか。
悪魔について、刀について、ヴァルバニルについて…。
最低限の知識は提供したが、彼は、そこから自分が国益を提供する術を自力で見出し、双方が納得できる形に纏めた。
刀匠としてだけでなく、彼には交渉事で身を立てるくらいの才覚があるらしい。
まだ粗削りではあるが、違った形で出会っていたら、彼を外交官にすべく教育したかも知れない。
これが味方になるとすれば頼もしいが、しかし条件の六項が気にかかる。
これだけの洞察力を持ちながら、自分はあくまで”一市民”でいたい、一市民としての分を越える協力はできないと、そう言っているのだ。
だが、それは欲張りというものかも知れない。
彼の刀がもたらす利益だけでも、元が取れる取れないという次元を遥かに超越しているのだから。

「…分かりました、その話を受けましょう。
ユウさん、魅力的な提案をありがとうございます」

「本当ですか！ありがとうございます！！
ユウ、やったじゃないか！よかったな！」

満面の笑みを浮かべて我が事のように喜ぶセシリー。
ばんばんと叩かれる肩が地味に痛いのだが、喜んでくれる彼女の気持ちが嬉しかった。
そんなセシリーを微笑ましげに見ているハンニバル。
ヒューゴーの目にも同じ色が見て取れたが、同時に僕を見る目が少し鋭い。
それが後になって妙に気にかかったのだが、それは余談である。

「ふふ、喜んで頂けて何よりですよ。
では具体的な打ち合わせに入りましょうか」

話はまだまだ終わらない。
だが、確かな一歩を歩みだしたことを、優は感じていた。

第七話

「で、なんでここなんだ」

憮然として言い放つルーク。
それはこっちが聞きたい、という反論をぐっと飲み込む優。
ようやく一歩踏み出したと思ったら、爪先に石があってつまづいた。
そんな気分である。

涙目で見上げた先にあるのは「工房リーザ」の看板。

「一から鍛冶場を建設する程の余裕も時間もありませんし、かといって既存の空いている鍛冶場なんて都合のいいものもない。
ならば、既存の空いていない鍛冶場に行ってもらうのが一番です。
丁度、貴方と同じく刀鍛冶が都市にいることですし、そこへ行ってもらいましょう」

満面の笑みでそう言い放ったヒューゴーの顔が思い出される。
あの顔に悪意など欠片も見えなかった。
演技か、それとも無意識か。どちらにせよ心底タチの悪い市長である。
もっとも、ルークと優が初対面でこじれにこじれたなどという話を知るはずもない市長に悪意など込めようもないのだが、優はそこまで頭が回っていなかった。

「まぁそう落ち込むなユウ…きっと上手くいくって」

そう言って励ましてくれるセシリー。
その額に一筋の冷や汗が無かったら、もう少し説得力があっただろ

う。

「チッ…まぁ玄関先で雁首揃えて言い合っててもしょうがない…とりあえず入れ。
…おいリサ、茶でも淹れて来い」

顎で促し、後ろで控えていたリサにそう言い放ち、彼はつかつかと居間へ歩き去っていく。

「ハ、ハイ、すぐに！」

ぱたぱたと台所へ走りゆくリサ。
こき使われてるんだなぁ…と憐憫の情を抱く優。
直後に自分もこれから同じ立場になると思い至って、とことん凹んだ。

「先が思いやられる…とほほ」

遣る瀬無さに肩を落としながら、優はルークに続いた。

＊＊＊

「ふぅん…コイツの生活費は都市が全額負担、その上で援助金増額か…悪くない条件ではある…が」

市長が手ずから筆をとった紹介状を読み、ルークはつぶやく。

「何でウチなんだ」

その目は雄弁に語る。
曰く、「迷惑だ」と。

「それはアレだ、ユウもルークも同じ刀鍛冶だし、技術交換や意見交換もできるだろう。
弟子のリサを育てるにも、ルークが手が離せない状態になればユウが練習を見てくれるだろうしな。
ほら、いいことづくめじゃないか」

そう口添えしてくれるセシリーの額には、まだ一筋の冷や汗がある。
（無茶です市長…）
その表情は、やはりそう語っている。

「リサの指導は俺一人で十分だ。その程度の時間は普通に取れる。
それに技術や意見の交換と言うがな、そいつにどれほどの事が分かるんだ？
実戦用の刀を打ったことも無い小僧に、な」

彼が言い放ったその一言に、優はカチンと来た。
腕はまだまだ発展途上だが、自分には現代科学に裏打ちされた知識がある。
経験則の科学しか持たない彼に、知識の面で負けはしない。
何より彼には、ルークには無いアドバンテージがある。

「…だったら、これから刀を一振り打たせてくれませんか？
僕の鍛錬を見て、技術交換・意見交換の相手とするに足るか否か、貴方の目で判断してください。
相槌はリサさんにお願いします。材料の玉鋼の代金、リサさんへの報酬、鍛冶場の借用代もお支払いましょう。

今月分の都市からの援助金はもう貰ってきてますから、現金一括前払いで。
…いかがです？」
挑むような目でそう言い放つユウに、ルークは唸った。
思えば、父以外では他人の鍛錬を見た経験が無い。
自分の鍛錬法は父から受け継いだものだから、厳密に言えばルークは自分以外の鍛練法を知らないのだ。
今来ている注文も急ぎではない。刀一振り鍛えた後に始めても余裕で間に合う。
自分の刀の鍛錬が遅れることには正直閉口するが、それはユウの鍛錬を見て得るものがあると仮定すれば元は取れるだろう。
実戦用ではなかったにしても、やはりあの刀は優れていたのだから。
「…いいだろう。リサ、先に行って準備をしていろ」
「ハイッ！任せてくださいデス！」
やはり、見習いといえどリサも刀鍛冶の魂を持っているのだろう。
ユウの鍛錬の相槌を務めることを喜んでいるらしく、その表情は明るかった。
ぱたぱたと鍛冶場へ走っていく彼女を見送った後、ルークはこちらに向き直り、そして口を開く。
「お前の腕、見せて貰うぞ」
上等。そんな言葉を思い浮かべつつ、ユウは答えた。
「どうぞ、存分に。さっきの言葉、後悔してもらいますよ！」

＊＊＊

「ヒューゴー…本当にこれで良かったのか？」

「…私は、これでいいと思っていますよ。実際どうなのかは、時間が経てば分かります」

さり気なく、それでいて調和のとれた気品を放つ調度品に囲まれた、静かな一室。
市長室と呼ばれるそこに、二人の男がいた。
小さく開けた窓からは、市場の呼び込みの声や子供たちの笑い声が遠く聞こえてくる。

「もう時間が無い…。これで彼に火が点いてくれれば、あるいは…」

「最早じっと待っていられる時期は過ぎた。
尻を蹴っ飛ばしてでも燃えさせねばならぬか…。
ワシは今、己の無力がどうしようもなく憤ろしい」

「皆まで言わないでください、ハンニバルくん。
私も…まったく同じ気持ちですよ」

前途ある若者達に、世界の命運を切り開くという大きすぎる責を負わせねばならぬこと。
自分たちは、その若者達の尻を張り飛ばして促すことしかできないのだ。

情けない。情けなくて仕方ない。
何が市長か、何が団長か。
苦渋の色を目に宿し、手のひらに爪を食い込ませている二人の心中を知る者は、他にはいない。
「…悔やんでいても仕方ない。話題を変えるぞ、ヒューゴー」
軽く頭を振って雑念を振り払い、おもむろに口を開くハンニバル。
「おや、まだ何かありましたか？」
「うむ…実は先の国境付近に現れた盗賊共だがな、追調査を行っていた所、別行動を取っていた者を捕縛できたのだ」
「それは朗報ですね。人外や悪魔に皆殺しにされて尋問すらできなかったですから…。
それで、連中の背後関係は？」
そう言う市長の顔には、先ほどの苦渋の色はもはや無く。
都市を導き、率いる者の自信と信念に満ちていた。
「うむ、連中はどうやら傭兵崩れの寄せ集めだったらしい。
首領であった男、初めに悪魔契約を行った方の男だが、これも即席で選ばれただけの者で、特筆すべき経歴も技能も無かったようだ」
「選ばれた…？盗賊が互選して首領を選んだとでも言うのですか？
ちょっと信じづらいですが…」
そんな平和的な方法が採れる連中なら、そもそも盗賊などやるはず

がないのだ。
喧嘩で勝ったから首領になった、とでも言われた方がまだ信用できる。

「いいや、そうではない。盗賊共が人外を使役していたというのは報告書で読んだだろう？
人外と、それを操るための薬物を与えたのはとある商人だったそうだ。
首領を選んだのもそいつだ。おそらく、連中が己の死言（しごん）を知っていたのもこの男が原因だろう。
素性は一切不明、足取りもつかめておらん」

死言。
それは己の心臓に刻まれた言葉であり、悪魔契約を行使する際に唱えねばならぬ文言（もんごん）である。
生まれた時からすべての者の心臓に刻まれたこの文言は、絶対に本人にしか読めない。
ヴァルバニルが吐き出す霊体によって刻まれたこの文言を知る方法は、二つ。
一つは外科手術で己の胸を切り開くこと。術中に鏡越しに見せるか、紙に書き写したものを術後に見せるか。
もう一つは殆ど知られていないが、ヴァルバニルから聞くことだ。
ブレア火山の底に眠るヴァルバニルにそうそう会いに行けるわけもないから、連中は外科手術で己の死言を知ったことになる。
恐らく、連中に手術を施したのは…。

「いよいよその商人が怪しいですね。よく調べておかねば…」

「あぁ、それは既に命じてある。だが、期待はできんな」

事態は、まだ激動の中にあった。

第八話

「では、始める前にいくつかお話しを。いいですか、リサさん？」

「は、ハイ、何でしょうか？」

緊張と興味と不安を足して三で割ったような表情で、リサが答える。ルークも、いったい何を話すつもりかと興味深げな顔をしている。ちなみに、この場にセシリーはいない。話が纏まると、後で顔を出すと言い残して仕事に戻っていった。

「初めて顔見せに伺った時に居間の壁に架けてあった刀を拝見したのですが…

あれ、甲伏せ拵えですよね？分かります？甲伏せ」

「はいデス、甲伏せで打ってある刀ですが…どうして？」

リサはぽかんとした顔で聞いてくる。

甲伏せ以外に拵えがあるなど聞いたことがない。

刀＝甲伏せ拵え　という図式が成り立っている彼女にとって、それは当たり前すぎることを問う質問だったのだ。

例えるなら、ルークさんは男性ですか？と聞くようなもの。

もちろんそんな例えを口に出せば当人に張り倒されるから、決して言わないが。

ルークも、何を当たり前のことを、と言いたげな顔をしている。眉間に皺を寄せて。

「やはりそうですか。というか、用語も同じなんですね、不思議だけど」

ユウはここと は違う世界からやってきた鍛冶師。
悪魔だの祈祷契約だのが存在しない世界からやってきた彼とこの世界を繋ぐ唯一の物が、刀。
不思議なことに、違う世界なのに同じ武器が存在し、その製法技術における用語も同一であった。
その理由はさっぱり分からないが、ともあれ話はしやすくなる。喜ぶべきことであろう。

「僕の相槌を務めて頂くにあたって、まずは甲伏せの構造をきっぱり忘れてもらう必要があります」

「え…えぇ？甲伏せを忘れろって…じゃあどうやって打つって言うんデス？」

リサもルークも、戸惑った顔をしている。
何を言っているんだこいつは。顔にそう書いてあった。

「やはり貴方がたは甲伏せしか知らないようですね。
前に見せた僕の刀、アレは甲伏せで打ったものではないんです」

二人の顔は、戸惑いから驚愕へと変わった。

「甲伏せじゃないだと？というか、甲伏せ拵え以外の構造が存在したのか！？」

見ているだけのはずのルークが、たまらず口を挟んでくる。

「えぇ、あの刀は”本三枚”と呼ばれる構造で打ったものです」

「ほんさんまい…デスか？」
峰には甲伏せと同様に心鉄を、刃には皮鉄よりもつよい刃金を用いる。
そして、その二つの部材を、左右二つに分けた皮鉄で挟み込んで合わせる。
これが本三枚拵えだ。
「ふえぇ…そんな方法があったとは、驚きデス…」
「あぁ、俺もこの方法は知らなかった…なるほどな、刃金か…」
驚き、感嘆、興味。
二人の顔はこれまでに無いほど鍛冶師らしくなっていた。
「本三枚では、選別の段階で皮鉄よりもつよい鉄を別に選び出しますから、三種類に分けることになります。
また、部材の数は心鉄、刃金、皮鉄二つで計四つ。甲伏せは二つですから、これまでの倍。
折り返しは8回としましょう。
甲伏せと比べるとかなりキツい鍛練になりますが…いけますか？リサさん」
「ば、倍デスか…」
たらりと冷や汗をかきつつも、リサは答えた。
「やります！任せてくださいデス！」
（心配だ…）

華奢な体つきをしているリサに、こんな重労働をさせるのは正直可哀想なのだ。
辛いだろうに、それでも健気に答えるリサの笑顔に、じくじくと胸の痛みを感じる。

「無理はするな、リサ。キツくなったらすぐに言え。
俺が代わってやる。…というか、やらせろ」

「るるるルークさん！年端もいかない少女になんということを！！
見損ないましたよ貴方が童女趣へブッ！」

「人聞きの悪すぎる冗談を飛ばすなド阿呆がっ！！！」

「うぅ、冗談なのに…」

顔面に突き刺さった拳が鼻血で赤く染まっていく。
横で聞いていたリサの顔も恥ずかしさに真っ赤に染まった。

「さっさと始めるぞ馬鹿共！」

怒りを振り払うように言い放つルーク。
その言葉に、二人の目が光る。

＊＊＊

「ふぅ、巡回はこんなものか。
次の巡回まで間があるし、装備の点検でも…」

時間は午後を少し過ぎたくらい。
日課のパトロールを終えて騎士団の事務所へ戻ってきたセシリーは、手持無沙汰となっていた。
事が起これば死ぬほど忙しいが、事が無ければあまりやることは多くないのだ。
それでも、有事に備えることは自衛騎士の大切な仕事。
空いた時間を訓練や装備の点検に充てる自衛騎士は多い。
中には自主的な巡回と称して市を冷やかしたり私的な買い物に出かける者もいるが、それは余談である。

「フン…暇そうだな、セシリー・キャンベル」

後ろから嘲笑交じりの声がかかる。
穏やかだった心が一瞬にしてささくれ立つのを感じた。
無視したい衝動をぐっと堪えて、後ろを振り向く。

「…何の用ですか、レジナルドさん」

筋肉質の引き締まった体躯に、日に焼けた精悍な顔をした大柄の男。
現場一筋の彼の髪は後ろへ撫でつけられ、日光に晒され続けたために色素が抜けかけ、薄茶色を晒している。
実力は高いが、ひたすら頑固で不器用な男である。
どうやら女だてらに騎士をやっているセシリーが気に食わないようで、何かにつけて皮肉を飛ばしてくる。
一言で言えば、うっとうしい男であった。

「ハンニバル団長がお呼びだ。何かお前に任務を与えるつもりらしい。団長室へ行け。
お前に任せる程度だから大した任務ではないだろうが、精々励む

んだな」

言わなくてもいい余計な言葉をつけて、彼は去っていく。
心の中で思い切り舌を出してやったセシリーは、憤懣やる方ないままに、団長室へと足を運んだ。

……

……

…

「セシリー・キャンベル、参りました」

「おぉ、来たか。入れ！」

「失礼します！」

ノックをして、呼びかけ、返事を聞いて、静かにドアを開ける。
上司の前に出るのだ、無様な真似はできない。
そんなことを気にする人じゃないことは分かっているが、やはり緊張はするのである。

「わざわざ呼び出してすまんな。
実は、お前に頼みたいことがあるのだ」

「いえ、お気になさらず…それで、頼みとは？」

「うむ…実は、先の盗賊一派の件だがな、どうやら目的は市の襲撃と、とある出品物の奪取であったらしいのだ。
そのために集められた一党なのだが、市の開催まで間があるために手慰みとして盗賊行為に走っていたらしい。
まぁおかげで事前に討伐することができたのだが…」

そこまで説明されれば、セシリーにも何となく話が見えてくる。

「肝心の黒幕は、まだ見つかっていませんね。また何か仕掛けてくる可能性も…」

「そう、そういうことだ。そこでな、その出品物の警備を、お前に頼みたいのだ」

なるほど、それが任務か。しかし…

「一つ気にかかるのですが…何故私なんでしょう？
他に腕の立つ者は大勢いるでしょうに。というか、私一人でやるんですか？」

「…最もな疑問だな…。
説明するのが難しい。丁度いいからお前も会っておくべきだろう。
…ついてこい、ヒューゴーの部屋へ行くぞ」

呟いて一人で納得し、ずかずかと部屋を出ていく。
会っておくべき？出品”物”だろう？見ておくならわかるが、会っておく？
分からないことだらけだが、行けば分かるはず。
そう思い直し、セシリーは上司に続いた。

市長室のドアを開け、そこに待っていたのは…。

戦友。後にそう呼ぶようになる者。
陳腐な言葉だが、まさしく運命の出会いであった。
彼女は、後にそう語ったという。

第九話

市長室。
そこは、独立交易都市ハウスマンの頂点に立つ者の居室である。
この都市の政庁である公務役所は、一から六の番街に置かれている。
農地ばかりの七番街だけは、六番街公務役所の管轄になっているが。
このうち、市長室が配置されているのが、三番街公務役所であった。
独立交易都市の領域の丁度中央に位置するのが三番街であったから、
というのがその理由なのだろう。

「ヒューゴー、ワシだ。セシリー・キャンベルを連れてきたぞ」

岩塊のような拳でドアをノックし、呼ばわる。
どうぞ、という返事を聞いてから、ドアを開け、中へ。

「独立交易都市公務員三番街自衛騎士団所属、セシリー・キャンベル。参りました」

緊張に強張る体を強引に動かし、佇まいを正して名乗る。
魔人が目覚めたと聞いたときには頭がカッとなってこの部屋へ飛び込んだのだが、私は何と言うことをしたのか。
今になってそれがどれほど大それたことだったかを感じていた。
冷静になれば、自然と緊張する。ここは、そうなるに足る場所なのだから。

「あぁ、良く来てくれました、セシリー君。
こないだぶりでしょうか。その節はどうも」

ふわりと笑って、触れられたくない愚行に触れられる。

じくりと痛む胸を押さえたい衝動に駆られつつ、引きつった笑みを浮かべざるを得なかった。

「あ、あはは…アレは忘れて頂けると…その、申し訳ありませんでした」

「何、気にしてはおりませんよ。むしろ感心したくらいで…。
さて、ではそろそろ本題に入りましょうか」

そこで、市長はふと隣を見る。
緊張で目に入っていなかったが、そこにいた人物は、明らかにこの場にそぐわない恰好をしていた。

肩から先と臍を大胆に露出した淡い緑の衣装。
市長室にいるより酒場や劇場にいた方がしっくり来るであろうその女性の服装は、一言で言えば「踊り子」であった。
淡い栗色の、流れるような長髪。
鼻筋の通った整ったその顔立ちは、男であれば決して放ってはおけない美形。
形のいい胸にくびれた腰、ふくよかなお尻。
だが、そんな肢体を踊り子の衣装で包んでいる割に扇情的な雰囲気が無い。
くりくりとした大きな目と子供のように無邪気な表情がそうさせているのだろうか。

「あの、市長…こちらの女性は？」

美人は美人、穏やかなその表情からも悪い印象は一切抱かなかった。
ただ、そう聞くのは「この場に何故いるのか分からない」からだった。

「や、あたしはアリア。よろしくね」
しゅたっと手を挙げ、人懐っこい笑みを浮かべて握手を求めて手を差し出してくる。
セシリーは、反射的に手を差し出し、握手に応じていた。
そうさせるだけの魅力が、この女性にはあったのだ。
「私は独立交易都市公務員三番街自衛騎士団所属、セシリー・キャンベルです。よろしく」
満面の笑みを浮かべてがしっと手を掴まれ、上下にぶんぶか振られる。
腕から肩、胴までがくんがくんと揺らされて、セシリーは引きつった笑みを浮かべた。
「それで、市長…私は何を警護すれば？」
その問いに、しかし市長は困惑の表情を浮かべ、次に傍らに立つ大男を見やった。
「…話していないのですか、ハンニバル君？」
「あぁ。その方が面白いだろう？」
「悪趣味だねぇ、おっちゃんも」
ジト目でハンニバルを睨む市長。
にやりと笑む上司。
悪戯っ子さながらに、にひひと笑う踊り子。

何が何だか分からず目を白黒させるセシリーに助け舟を出したのは、踊り子だった。

「あなたが警護するのは、あたしだよ」

…市への出品物を警護するのではなかったのか？
疑問を込めて市長を見やる。

「あー、えー…彼女の言う通り、あなたには彼女の警護について頂きます」

どことなく言いづらそうにしてハンニバルを横目で睨みつつ、アリアの言葉を継ぐ市長。

私の警護対象は市への出品物。
そして、彼女が私の警護対象。
以上二つの前提から三段論法によって導かれる等式の両辺にあるのは…。
その瞬間、脳は怒りという名の激情に満たされた。

「市長ッ！あなたはまさかこの都市で人身売買を行う気ですか！
しかも都市公認の市で、都市がそれに関わるとはッ！！！」

「えェ！？いやあのそうではなく…」

あたふたと否定しようとするその姿に、更なる怒りが込み上げる。
何と往生際の悪い男か。構わず続ける。

「見損ないましたよ市長！
このようにうら若い女性を売り飛ばそうなどという外道の姦計を

見過ごすどころか、その片ふぎゃん！！！」

しかし、その弾劾は、私の背を縮めようとするかのような真上からの衝撃に、中断を余儀なくされた。

「落ち着かんか馬鹿者。そんな真似をワシが許すと思うか」

半目でじろりとこちらを睨む上司。

その怒気も怖いが、目尻に滲んでいるであろう涙は、純粋に拳骨が痛すぎたためだ。

頭蓋骨が割れていないか本気で心配だ。

「うぅ…すいません…しかし、それでは彼女が警護対象というのは一体どういうことですか？」

返ってきたのは問いの答えではなく、快活な笑い声であった。

「あははは！セシリーって面白いのねぇ！

それに、私が売り買いされることに怒ってくれるんだ？そこらへんの男よりよっぽど素敵！」

腹を抱えてひとしきり笑い、酸欠気味でひぃひぃ言いつつ涙を拭って言うアリア。

「いやあの…褒めてくれるのは嬉しいのだが、事情がさっぱり…」

困惑が頂点に達した辺りで、ようやく市長が種明かしをしてくれる。

私の戸惑う様を眺めているなんて、やはり人が悪い。

「アリアくんは人間じゃないんだよ」

「な…！？」

唐突に明かされたタネに、しかし私は納得どころか驚愕するばかりだった。
それに構わず、当人はぐっと親指を立ててみせる。

「そ。あたしは魔剣。魔剣アリアよ、よろしくねっ！」

第十話

けたたましい打撃音が幾度も響き渡る。
咽返りそうな熱気の中、膨大な熱を宿した鉄をただひたすらに打つ。
飛び散る火花。流れ落ちる汗。
薄暗い中で赤く光る鉄を見つめ続け、かすんでくる目をこすりながら、鉄に命を吹き込む。

「まだです。もう少し、もう少しだけ薄く！」

「わかってるってぇ…のッ！」

重い相槌を垂直に振り上げ、重さに任せて振り”落とす”。
柄を掴む腕はただ、その軌跡に導くだけ。
力づくで打つのではないにしても、これを続けるのは辛い。
それはそうだろう、大の大人でも音を上げるのだから。
疲れが見え始めたリサに代わって相槌を振るうルークの顔にも、びっしりと汗の粒がついていた。

打つ。
まだ打つ。
まだまだ打つ。
打って打って打ちまくる。

一人立ちしてからは久しく相槌を取ることなど無かったルークだが、しかしその技はリサのそれよりもずっと安定していた。
子供の頃から父親の相槌を務めていたのだから、当然である。
そんな彼の、経験に裏打ちされた鍛冶師としての本能が叫んでいる。

こいつは、良い刀になる。
早く生まれて来い。
今まさに刀としての産声を上げようとしている、赤鉄（あかがね）。
ルークもユウもリサも、静かな興奮を感じていた。

「さぁ…焼き入れです！」

これが、鍛冶師の醍醐味。

…

……

……

「…焼き入れ、完了…！」

「…むぅ…」

「ふわぁ…綺麗デス…」

喜びを滲ませてつぶやく優。
呻くように感嘆の吐息を漏らすルーク。
研ぎ澄まされた刀身の輝きに魅入られるリサ。

三者三様。
しかし、その心境は全て「歓喜」にカテゴライズされるものであった。

ぽたぽたと水が滴るその刃は、三人の喜びと誇らしさを体現するかのように緩やかに反り返る。
刃にそって流れる刃紋の筋は、一点の歪みもない。
いわゆる「直刃（すぐは）」と呼ばれる刃紋である。
光に当てるように刀身を傾けて覗き込むと、淡くけぶるように光る。

「…匂出来（においでき）デスね…とっても優しい感じがします…」

刃金と地金の境界付近には、焼き入れの際にマルテンサイトと呼ばれる微粒子が生じる。
これが焼き入れ後に刃紋を構成する一要素となる。
その粒子は一振りの刀の中に大小入り混じって存在するのだが、大小どちらが勝っているかで呼び方が変わるのだ。
大きな粒子が勝っていれば、沸出来（にえでき）、小さな粒子が勝っていれば、匂出来（においでき）と呼ばれる。
前者は刃を覗くとギラリと強く光り、後者はどちらかというと艶消しのような淡い光り方をする。
この刀は匂出来。穏やかに、優しく光を反射する刃紋である。

「帽子は焼詰（やきづめ）…筋に歪みが無い。実にいい刀だ…」

帽子とは刃紋の終着点、切っ先周辺の刃紋の事である。
ここは刀の顔とも言われ、帽子の出来は刀の美しさを大きく左右するのだ。
形によって幾つも種類があるが、焼詰とは刃側から刃筋に沿って刃紋が伸び、そのまま峰に真っ直ぐ合流して終わっている形のものを

指す。
大丸(おおまる)、小丸(こまる)と呼ばれる形の帽子が最もよく見られるが、これらは刃筋に沿って伸び、峰に近づくにつれ柄の側へと湾曲して合流する。このラインが大回りのものを大丸、小回りのものを小丸と呼ぶ。どの形が良いとかでなく、問題は他の部分の刃紋とマッチしているかどうかである。
この刀は直刃(すぐは)に焼詰帽子(やきづめぼうし)。その筋には鍔元(つばもと)から切っ先に至るまで一切の歪みも無く、誇らしげにすら見えた。

そして、どれほど時間が経ったろう。
もはや評する言葉すらなく、いや、言葉にして評する必要すら感じず、三人はただじっと刀を見つめていたのである。

心地よい疲労と達成感に浸りながら美しい刀を愛でる。
自ら槌を振るった刀匠にのみ許される至福のひとときは、しかし来訪者によって唐突に終わりを告げたのである。

＊＊＊

「…ん？今、人の声がしたか？」
不意に耳に飛び込んだ遠い人の声。
どこか聞き覚えのあるこれは、女性の声だろうか。
「セシリーさんだと思いマス…あ、もうこんな時間！
ここらで切り上げてお昼にしませんか？私すぐ用意してきますね

！ごはんごはーん！！」

言うが早いか、ぱたぱたと母屋へ駆けていくリサ。
鍛錬で疲れているだろうに、飛び跳ねんばかりにして走っていくその後ろ姿。

後年、ユウもルークもセシリーもアリアも、口を揃えてこう評したそうだ。

「疲れたり落ち込んだりしているリサを元気にさせるには、ただ一言があればいい。『ご飯にしよう』と」

「私そこまで食い意地張ってないデスぅーーー！！」

リサがそう反論したかどうかは、記録には残っていない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6329t/

聖剣の刀鍛冶と悪魔の刀鍛冶

2011年5月30日06時54分発行